

話 題

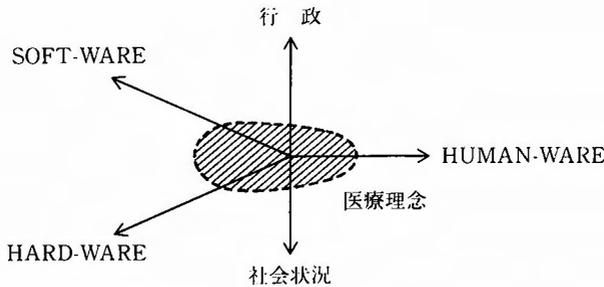
医 療 理 念

市立舞鶴市民病院

病院長 瀬戸山元一

[1] 医療理念の存在： 最近の医学は非常なスピードで進歩していることは周知の事実である。しかし、その高い水準の医学が本当に医療の現場で実践されているのであろうか。甚だ疑問であるといわざるを得ない。

医学が学問として登場する以前から医療は存在していたわけであり、いつの時代も医療が必要であることは万人の認めるところである。そして、医療の究極の目標のためには、やはり医学という科学が必要であることについても、誰もが異論がないところである。いいかえれば、日進月歩している医学が恒常的、公平かつ普遍的に社会に適應され、適切に提供されるなかでこそ医療が存在することになる。しかし、医療理念を考慮しないで成り立っている医療の現場は、多くの場合が一般社会の情勢から孤立しているのが現状である。しかも、固定化された狭義の医学教育がもたらす一方通行の実践の場で、その行為がいかに医療であるかの如く映っていても、結果として真の医療を遅延させ、最悪の場合には本来なされなければならない医療の実践をも、不可能にしているのである。以上のようなことから、医学が医療として社会生活の営みに貢献でき得るためには、医療理念の存在が十分吟味されなくてはならないと思うのである。



—医療理念システム—

[2] 医療理念の確立： 医療理念の確立は、最重要なる命題である。医療理念は、図の如く三次的にとらえられるべきであろう。垂直軸の行政—社会状況、水平軸の SOFT, HARD そして HUMAN-WARE が十分に検討され、意味づけられることにより、その理念はより偉大で最良のものとなることは信じて疑わない。

MOTOICHI SETOYAMA: My Philosophy of Medicine
President of Maizuru Municipal Hospital, 150-11 Aza-Mizoshiri, Maizuru City, Kyoto Japan 〒625
Key words: Philosophy of Medicine, System of Medicine
索引語：医療理念，医療システム

1) 医療理念の垂直軸：医療として「保健、診療、福祉」の三位一体融合論理が貫かれ、広い意味での行政がその柱になることはいうに及ばないことである。その医療理念は、社会状況を基盤として構想されるべきものであり、しかも社会状況は常に変化するものであるから、その変化に応じた理念も当然必要となってくる。しかし、医療理念の根幹は元来不滅不変なものであると考えるのが妥当であり、社会状況の変化に応じて変化するものは理念そのものというよりも、その実践における価値観の変化であり、目的の変化であり、方法の変化であるという方が正しいかも知れない。ここでの社会状況とは、狭義の医療要素にのみとらわれることなく、人間の行動や環境など広く目をむけた状態をさすことはいうまでもない。

具体的には、各人が或いは各組織が自己の個人的価値観や立場から、一方的な主張をするだけでは理念の確立はあり得ず、単に机上の建前論や形式論では、実際の成果や将来への発展は到底期待し得ないことは自明の理である。現実と理想の整合、本音と建前との調整、部分と全体との調和、更には機能分担と連携など、より本質的な課題についての、十分なる認識と検討がなされ、社会状況の実態把握のみにとどまることなく、将来予測をするなかで絶えず理想への方向づけがなされなければならないのである。と同時に、医療理念は絶対に社会への押し付けになってはならない。地域社会のニーズを十分に認識した上で、いかに諸条件との調整をするかということが重要である。その調整には、地域社会の意識レベルの向上をも期待し得るような教育も必要欠くべからざるものである。

2) 医療理念の水平軸：運営・管理を主体とする SOFT、施設・設備を主体とする HARD、そして人間関係を主体とする HUMAN-WARE としてとらえることができる。この三者は確立された医療理念の実践にあたって関与し、かつ必要欠くべからざる要素であり、お互いに密接なる関係を保ちながら、医療理念の強化・向上に絶えず影響を与えると同時に、実践に臨機な対応をも可能とするものである。

医療の大前提が社会発展のためのものであるということからも、医療は一つの社会システムとしてとらえられなければならない。医療実践の現場においても、患者さんと医療人、或いは地域住民と医療人との関係が最優先して考えられなければならないと同時に、医療チームの構成要素間の相互信頼、協力、連携などは不可欠である。この3つの WARE がうまく機能しなければ、医療は科学としての医学提供者側の押し付けだけでおわり、その結果として、医療の荒廃、医療の不在につながることは明らかである。医療の構想、目的や方法の検討などにあたっては、関係する人全員が自主的に参画し、複雑、不確定な人間関係が有機的に結び付けられ、合意しあえるような、人間主導型が推進されることが望ましい。特に HUMAN-WARE の確立こそが、理念の実践にあたっては最大の課題であるといえる。

[3] 医療理念の評価：医療理念はその実践がともなってこそ、理念として確立することを忘れてはならない。理念の構想にあたって十分なる検討、配慮がなされたとしても、その実践のなかで状況変化などにより、新たな問題点が発生することは事実有り得ることである。理念に対する医療の実践現場での評価と、理念からみた医療実践の評価は共に不可欠である。その意味でも、今後共よりレベル・アップを計るためには、PLAN-DO-SEE-CHECK の思考回路を常に持ち続けることが、最重要であると考えられる。